

半七捕物帳

旅絵師

岡本綺堂

青空文庫

「江戸時代のおんみつ隠密おんみつというのはどういう役なんです」と、ある時わたしは半七老人に訊きいた。

「芝居や講釈でも御存知の通り、一種の国事探偵というようなものです」と、老人は答えました。「徳川幕府で諸大名の領分へ隠密を入れるというのは、むかしから誰も知っていることですが、その隠密は誰がうけたまわって、どういう役目を勤めるかということがよく判っていないようです。この隠密の役目を勤めるのは、江戸城内にある吹ふきあげ上の御庭番で、一代に一度このお役を勤めればいいことになっていました。

なぜ御庭番がこのお役を勤めることになったかというところ、それにはいろいろの説がありますが、三代將軍家光公がある時、吹上の御庭をあるいている時に、御庭番の水野なにかしというのを呼んで、これからすぐに薩摩へ下くだって、鹿児島鹿児島の城中の模様を隠密に見とどけてまいれと、將軍自身に仰せ付けられたので、水野はその隠密の洩れるのを恐れて、自分の屋敷へ帰らずにお城からまっすぐに九州へ下ったということです。水野が庭作りにな

けて薩摩へ入り込んで、城内の蘇鉄そてつの根方に手裏剣を刺し込んで来たというのは有名な話ですが、嘘だかほんとうだか判りません。とにかくそれが先例になって、隠密の役はいつも吹上の御庭番が勤めることになったのだと、江戸時代ではもっぱら云い伝えていました。御庭番は吹上奉行の組下で若年寄の支配をうけていましたが、隠密の役に限ってかならず將軍自身から直接に云い付けられるのが例となつていたので、御庭番はさして重い役ではありませんが、隠密の役は非常に重いことになっていました。

それですから、御庭番の家に生まれた者はなんどき其の役目を云い付けられるか判らないので、その覚悟をしていなければなりません。勿論、侍の姿で入り込むわけには行きませんから、いざという時には何に化けるか、どの人もふだんから考えているんです。手さきの器用なものは何かの職人になる。遊芸の出来る者は芸人になる。勝負事の好きなものたびあきんどは博奕打ばくちうちになる。おべんちやらの巧い奴は旅商人たびあきんどになる。碁打ちになる、俳諧師せきぞろになる。梅川の浄瑠璃じょうるりじゃあないが、あるいは順礼じゆんれい、古手買、節季候せきぞろにまで身をやつす工夫くふうを子供の時から考えていた位です。そうして、かの水野が先例になつたのでしよう。その役目を云い付かると同時に將軍から直々じきじき御手許金を下さる。それを路用にしてお城からまっすぐに出発するのが習いで、自分の家へ帰ることは許されないうことになっていま

した。

幕府が諸大名の領内へ隠密を出すのは、いろいろの場合があるので一概には云えませんが、大名の代換だいがわりという時には必ず隠密を出しました。それは例のお家騒動に注意するためです。前にもいう通り、隠密は一代に一度のお役で、それを首尾よく勤めさえすれば、あとは殆ど遊んでいるようなもので、まことに気楽な身分にも見えますが、この隠密という役はまったく命懸けで、どこの藩でも隠密が入り込んだことに気がつく、かならずそれを殺してしまいます。もともと秘密にやった使ですから、見す見す殺されたことを知っていて、幕府からは表向きの掛け合いは出来ません。所詮は泣き寝入りの殺され損になるに決まっていたものです。隠密の期限は一年で、それが三年をすぎても帰って来なければ、出先で殺されたものと認めて、その子か又は弟に家督相続を仰せ付けられることになっていました。しかしひと思いに殺されたのは運のいい方で、意地の悪い大名になるとそれを召し捕って、面当てらしく江戸へ送り還かえしてよこすのがあります。それですから、万一召し捕られた場合には、たとえどんな厳しい拷問をうけても、自分が公儀の隠密であるということ白状しないのが習いで、もし白状すれば当人は死罪、家は断絶です。そういう恐ろしいことになっていますから、隠密がもし召し捕られた場合には眼を瞑つむって責め殺

されるか、但しは自殺するか破牢するか、三つに一つを選ぶよりほかはないので、隠密はかならず着物の襟のなかにうす刃の切れ物を縫い込んでいました」

「なるほど、ずいぶん難儀な役ですね」

「それですから、隠密に出された人たちは、その出先で、いろいろのおそろしいこともあり、おかしきこともあり、悲劇喜劇さまざまですが、なにしろ命懸けで入り込むんですから、当人たちに取っては一生懸命の仕事です。いや、その隠密についてこんな話があります。これは今云った悲劇喜劇のなかでは余ほど毛色の変った方ですから、自分のことじゃありませんけれど、受け売りの昔話を一席弁じましょう。このお話は、その隠密の役目を間宮鉄次郎という人がうけたまわった時のことで、間宮さんはこの時二十五のやくど厄年しだったと云います。それから最初におことわり申しておくのは、このお話の舞台は主おもに奥州筋ですから、出る役者はみんな奥州弁でなければならぬんですが、とんだしら白石いしの揚屋のお茶番で、ただあやがあまを下手にやり損じると却かえってお笑いぐさですから、やっぱり江戸弁でまっすぐにお話し申します」

文政四年五月十日の朝、五ツ（午前八時）を少し過ぎた頃に、奥州街道の栗橋の関所を

無事に通り過ぎた七、八人の旅人がそろそろ繋つながって、房川ぼうかわの渡わたし(利根川)にさしかか
 った。そのなかには一人の若い旅絵師がまじっていた。渡し船は幾艘そくもあるので、このひ
 と群れは皆おなじ船に乗り込んで、河原と水とをあわせて三百間という大河のまん中まで
 漕ぎ出したときに、向うから渡ってくる船とすれ違った。広い河ではあるが、船の行き馴
 れている路はいつも決まっているので、両方の船は小舷こへりが摺れ合うほどに近寄って通る。
 船頭は馴れているので平気で棹さおを突つ張ると、今日はふだんより流れのぐあいが悪かった
 とみえて、急に傾いてゆれた船はたがいになれ違ちがう調子をはずして、向うから来た船の舳へ
 先さきがこつちの船の横よこへり舷へりへどんと突きあたった。

つき当てられた船はひどく揺れて傾いたので、乗っていた二、三人はあわてて起たちかか
 った。船頭があぶないと注意する間ひまもなしに、一人の若い娘はからだの中心を失って、河
 のなかへうしろ向きに転げ落ちてしまった。どの人も顔色を変えてあつと叫ぶ間に、船頭
 は棹をすてて飛び込んだ。かの旅絵師もつづいて飛び込んだ。見る見る川しもへ押し流さ
 れて行つた娘は、七、八間のところで旅絵師の手に掴つかまえられると、水練の巧みらしい彼
 は、娘を殆ど水のなかから差し上げるようにして、もとの船へ無事に泳いで帰つたので、
 大勢はおもわず喜びの声をあげた。取り分けその娘の親らしい老人と供の男とは手を合わ

せて彼を拜んだ。船頭は乗合一同にひどくあやまつて、ともかく向う岸まで船を送り着けた。

娘はさのみに弱つてもいかなかった。そのころは五月であるから凍えることもなかった。渡し小屋で濡れた単衣ひとえを着かえて、彼女は父と供の男とに介抱されながらしばらく休んでいるうちに、旅絵師は娘の無事を見とどけて、自分も着物を着かえて、そのまま行こうとする、大切な娘の命を助けられたそのお礼がまだ十分に云い足りないというので、老人はしきりに彼を抑留ひきとめた。娘だけを駕籠に乗せて、自分たちは近い宿しゆくまで一緒にあるに行つて、老人はある立場茶屋たてばの奥座敷へ無理にかの旅絵師を誘い込んで、ここであらためて礼を云つた上で酒や肴さかなを彼にすすめた。

老人は奥州の或る城下の町に穀屋こくやの店を持っている千倉屋伝兵衛という者であつた。年来の宿願しゆくがんであつた金毘羅こんびらまいりを思い立って、娘のおげんと下男の儀平をつれて、奥州から四国の琴平ことひらまで遠い旅を続けて、その帰りには江戸見物もして、今や帰国の途中であると話した。この時代に足弱あしよわと供の者とを連れて奥州から四国路までも旅行をするというのは、よつぽど裕福の身分でなければならぬことは判り切つていた。伝兵衛はもう六十と云つていたが、身の丈たけも高く、頬の肉も豊かで、見るから健すこやかな、いかにも温和

らしい福相をそなえた老人であった。

旅絵師も自分のゆく先を話した。かの芭蕉の「奥の細道」をたどって高館たかだちの旧跡や松島塩釜の名所を見物しながら奥州諸国を遍歴したい宿願で、三日前のゆうぐれに江戸を発ほつて足して、路草を食いながらここまで来たのであると云った。

「それはよい道連れが出来ました」と、伝兵衛は喜ばしそうに云った。「唯今申す通り、わたくし共も長の道中をすませて、これから奥州の故郷へ帰るものでございます。足弱連れで御迷惑かも知れませんが、これも何かの御縁で、途中まで御一緒においでなされませんか」

「いや、御迷惑とはこちらで申すこと、実はわたくしも奥州道中は初旅で、一向に案内が知れないので、心ぼそく思っていたところでございますから、御一緒にお連れくだされば大仕合わせでございます」

相談はすぐに決まって、山崎澹たんざん山とみずから名乗った若い旅絵師は、伝兵衛の一行に加わることになった。道連れといっても、これは自分の娘の命を救ってくれた恩人であるから、伝兵衛主従も決して彼を疎略には扱わなかった。

その晩は小山の宿しゆくに泊まったが、旅籠賃はたごその他はすべて伝兵衛が賄まかなった。これから幾日

もつづく道中に、それではまことに困ると澹山はしきりにことわったが、伝兵衛はどうしても肯きかなかつた。あくる晩は宇都宮に着いたが、その翌日も午ひるすぎまでここに逗留して、伝兵衛は澹山を案内して二荒神社などに参詣した。その後の道中も、毎晩の宿はかなりの上旅籠で、澹山はなんの不自由もなしに奥州路にはいった。

二

この年は正月から照りつづいて江戸近国は早かんばつ魃つゆに苦しんだと伝えられているが、白河から北にはその影響もなくて、五月の末には梅雨つゆらしいしめり勝ちの暗い天気が毎日つづいた。この雨にふり籠められたばかりでなく、旅絵師の澹山は千倉屋の奥の離れ座敷に閉じ籠こもつて、当分は再び草鞋わらじを穿はきそうもなかつた。

その頃の旅絵師といえ、ゆく先々で自分の絵を売って、それを路用としてそれからそれへと渡つてゆくのが習いであつた。千倉屋伝兵衛もその事情を知っているので、ともかくも自分の家に当分逗留して、相当の路用を作り溜めた上で出発することにしたらよからうと途中でも切しきりにすすめたので、澹山もその親切をよろこんで、云わるるままに千倉屋

の厄介になることにした。千倉屋は旅絵師が想像していたよりも更に大きい店構えで、十人あまりの奉公人が忙がしそうに働いていた。伝兵衛の女房は七、八年前に世を去ったということで、家族は主人のほかに惣領息子の伝四郎と妹娘のおげん二人ぎりであった。伝四郎は今年二十歳の独身者で、これも父に似て骨格のたくましい寡言の男であった。おげんは二つちがいの今年十八で、色のすぐれて白い、こちらでは先ず眼につくような美しい眼鼻立ちを具えながら、どことなく薄のろいようにも見えるおとなしい娘であることを、毎日一緒に連れ立って来た澹山は知っていた。

妹の命を救ってくれたということを聞いて、兄の伝四郎も若い旅絵師をよろこんで迎えた。彼は父と同じように、いつまでもここに逗留してくれと無愛想な口で澹山にすすめた。こうして一家の人々から款待されて、澹山の方でもひどく喜んで、自分の居間として貸して貰った離れ座敷を画室として、ここでゆっくりと絵絹や画仙紙をひろげることになると、伝兵衛も自分の家の屏風や掛物は勿論、心安い人々をそれからそれへと紹介して、澹山のために毎日の仕事をあたえてくれた。それらの仕事に忙がしく追われながら、六七八の三月はいつか過ぎて、ここらでは雪が降るといふ九月の中頃になった。

この三月のあいだには別に記すべき事もなかった。ただ彼の澹山が諸方から少なからず

画料を貰つて、その胴巻がよほど膨れて来たのと、娘のおげんと特に親しみを増したのと、この二カ条のほかには何事もなかつた。しかし、娘の問題は若い旅絵師に取つてすこぶる迷惑の筋であるらしかつた。娘は自分の恩人という以上に澹山を鄭重に取り扱つた。かれが朝夕の世話は奉公人どもの手を借らずに、娘が何もかも引き受けていた。その親切があまりに度を過ぎるのを澹山は内心あやぶみ恐れていながらも、むやみにここを立退くことの出来ない事情もあるらしく、迷惑を忍んで千倉屋の奥にうずくまっていた。

「先生。お寂しゅうござりましょう」

柴栗の焼いたのを盆に盛つて、おげんは行燈の前にその白い顔を見せた。奥州の夜寒こおろぎにもこの頃は鳴き絶えて、庭の銀杏いちょうの葉が闇のなかにさらさらと散る音がときどきに時雨かとも疑われた。娘は棚から茶道具をとりおろして来て、すぐに茶をいれる支度にかつた。

「いや、もう毎晩のこと、決してお構いくださるな」と、澹山は書きかけていた日記の筆を措いて見かえつた。「お父さんはどうなさつた。きようは一日お目にかからなかつたが……」

「父は午ひるから出ましてまだ戻りません。今夜は遅くなるでございましょう」

伝兵衛は囲碁が道楽で、ときどき夜ふかしをして帰ることは澹山も知っているので、別にそれを不思議とも思わなかった。

「兄さんは……」

「兄も父と一緒に出ました」

おげんは茶をすすめて、更に柴栗を剥むいてくれた。その白い指先をながめながら澹山はしずかに訊きいた。

「御用人の御子息はその後御催促には見えませんか」

「はい」

「どうも思うように出来ないので甚だ延引、なんとも申し訳がありません」と、澹山は小鬢びんをかいた。「頼まれたお方が余人でないのです、せいぜい腕を揮ふるおうと思っただけです、それがため却って筆先が固くなった気味で、まことにどうも困っています。千之丞殿も定めて御立腹、ひいては御推挙くださったお父さんにも御迷惑がかかろうと心配しています……」

「なんの、そんなことはございません」と、おげんは相手の顔を見つめながら云った。

「あんな人の頼んだ絵など、いつそいつまでも出来ない方がようござります」

この藩の用人荒木頼母たのもの伴千之丞は、伝兵衛の推拳で先ごろ千倉屋へたずねて来て、澹山せしおうぼに西王母の大幅を頼んで行った。その揮毫きこうがなかなかはかどらないので、五、六日前にも千之丞はその催促に来た。しかしその催促以外に、なにかの意味でおげんが千之丞を嫌っていることを、澹山もうすうす覚さとっていた。

「くどくも云う通り、頼まれたお方が余人でないの、わたくしも等閑なわざりには存じません」と、澹山は飽くまでもまじめに云い出した。「しかし、どうも出来ないものは仕方がないので、まあ、まあ、幾たびでも描き直して、これなればと自分でも得心とくしんのまいるまで根よくやってみるよりほかはありません。お前様からもよくお父さんに取りなして置いてください。頼みます」

おげんは微笑ほほえみながらうなずいた。片明かりの行燈は男と女の影を障子に映して、枕の草子の作者でなくても、憎きものに数えたいような影法師が黒くゆらいでいた。庭で銀杏いちょうの散るおとが又きこえた。

「千之丞殿の伯父御は先殿せんどの様の追腹おいばらを切られたとかいいますが、それはほんとうのことですか」と、澹山は思い出したように訊いた。

「確かなことは存じませんが、それは嘘だとか聞きました」と、おげんは躊躇ちゆうちよ躊躇ちよせずに

答えた。「先殿様の御葬式おとむらいがすむと間もなく、源太夫様もつづいてお亡なくなりなすつたので、世間では追腹などと申しますが、ほんとうは千之丞様の親御おやじたちが寄りあつまつて詰腹つめばらを切らせたのだとかいうことでござります」

「ほう。詰腹……」と、澹山は顔をしかめた。「武家では折りおりそんな噂を聞きますが、無得心のものを大勢がとりこめて切腹させる。考えてもおそろしい。しかし、源太夫殿とても御用人格の立派な御身分であるから、いわれ無しに詰腹など切らされる筈もあるまい。何かそこには深い仔細があることと思われるが……」

「大方そうでござりましょう」

「若殿の忠作様も実は御病死でない。それにも何か仔細があるように云う者もありますが、それも嘘ですか」と、澹山はまた訊いた。

「それもよくは存じません」

彼女もまんざら愚鈍でないので、いかに打ち解けた男のまえでも、領主の家の噂を軽々しく口外することはさすがに慎んでいるらしく見えたので、澹山も根問ねどいしないでその儘に口を噤つぶんだ。用人の死、若殿の死、この二つの問題はそれぎりで消えてしまって、話はやがて来る冬の噂、それもおげんの重い口から途切れ途切れに語られるだけで、あんま

澹山の興味を惹かないばかりか、今夜も五ツ（午後八時）を過ぎたのに、おげんはただ黙って坐り込んだままで容易に動きそうにも見えないので、澹山は例の迷惑を感じて来た。

「おげんさん。もう五ツ半頃でしょう。そろそろおやすみになったらどうです」

「はい」と、云つたばかりで、おげんはやはり素直に起ち上がりそうもなかった。

「早く行つてお寝やすみなさい」と、澹山は優しい声ながらも少し改まって云つた。

「はい」

彼女はやはり強情に坐り込んでいた。そうして、重い口をいよいよ洩らせながら云い出した。

「あの、わたくしのような不器用なものにも絵が習えましようか」

「誰でも習えないということはありません」と、澹山は、ほほえみながら答えた。

「では、これからあなたの弟子にして、教えていただくことは出来ますまいか」

澹山は返事に少し躊躇した。もとより良家の娘が道楽半分に習うというのであるから、その器用不器用などは大した問題でもなかったが、澹山の別に恐れるところは、彼女が絵筆の稽古をかこつけに、今後はいつそう親しく接近して来ることであつた。しかし今の場合、それをことわるに適當の口実をも見いだし得ないので、結局それを承知すると、おげ

んは初めて座をたつた。

「では、きつとお弟子にさせていただきます」

そこらの茶道具を片付けて、かれは自分で澹山の寢床をのべて、丁寧ていねいに挨拶して出て行った。そのうしろ姿を見送つて澹山は深い溜息をついた。

旅絵師山崎澹山の正体が吹上御庭番の間宮鉄次郎であることは云うまでもあるまい。この土地の領主は三年あまりの長なが煩わづらいで去年の秋に世を去つた。その臨終のふた月ほど前に、嫡ちやく子くしの忠作が急病で死んで、次男の忠之助を世嗣せいぎに直したいということ幕府に届けて出た。嫡子が死んで、次男がその跡に直るのは別にめずらしいことでもない。むしろそれは正当の順序であるので、幕府でも無論それを聞き届けたが、それから間もなく当主が死んだ。その葬式が済むと、つづいて用人の一人貝沢源太夫が死んだ。それが禁制の殉死であるともいい、または毒害ともいい、詰腹ともいう噂があつた。

こうなると、嫡子の急病というのも一種の疑いが起らないでもない。当主の余命がもう長くないのを見込んで、何者かが嫡子を毒害などして次男を相続人に押し立てようと企てた。その反対者たる用人の一人は何かの口実のもとに押し片付けられてしまった。大名の家の代換りには、こういうたぐいのいわゆる御家騒動がたびたび繰り返されるので、幕府

でも一応内偵をしなければならなかった。

そうでなくても、大名の代換りには必ず隠密を放つのが其の時代の例であるのに、仮りにもこういう疑いが付きまどつている以上、今度の隠密は比較的重大な役目になって来た。それをうけたまわつた鉄次郎は絵筆の嗜みのあるのを幸いに、旅絵師に化けて奥州へ下つてくる途中で、偶然に房川の渡しでおげんを救つたのが縁となつて、千倉屋伝兵衛と親しくなつた。しかも其の家は鉄次郎の澹山がこれから踏み込もうとする城下の町にあるというので、彼はこの上もない好都合をよろこんで、抑留められるままに千倉屋の客となつた。そうして三月あまりを送るうちに、彼は伝兵衛の推挙で城の用人荒木頼母の倅千之丞から掛物の揮毫を頼まれた。

城内の者に知己を得るといふ事は、澹山に取つては最も望むところであつたので、彼はいよいよ喜んでそれを引き受けたが、それがどうも思うように描きあがらないので、彼の心はひどく苦しめられた。あの絵師はまずいと一旦見限られてしまうと、城内の他の人々にも接近する機会を失うことになるので、彼はこの絵を腕一ぱいにかきたいと思つた。もう一つには万一自分が隠密であるということが発覚した暁に、江戸の侍はこんなまずい絵を描き残したと後日の笑いぐさにされるのが残念である。十分に念を入れて描きたいと、

あせれば躁^{あせ}るほど其の筆は妙に固くなつて、彼として相当の自信のあるような作物がどうしても出来あがらなかつた。おれはほんとうの絵師ではない。おれは侍で、単に一時の方便のために絵を描くのであるから、所詮は素人の眼を誤魔化し得るだけに、ただ小器用に手綺麗に塗り付けて置けばよいのである。田舎侍に何がわかるものかと時々こう思い直すこともありながら、彼はやはり自分の気が済まなかつた。現在の彼は江戸の侍、間宮鉄次郎の名を忘れて、山崎澹山という一個の芸術家となつて苦しみ悩んでいるのであつた。

その最中に千倉屋の娘がうるさく付きまゝとつて来て、いよいよ自分の弟子にしてくれという。それを邪^{じゃけん}慳^{けん}に突き放すすべもない彼は、いつそ此の家を逃げ出して、どこか静かなところに隠れて思うような絵をかいてみたいとも思ったが、その小さい目的のために他の大きい目的を犠牲にすることの出来ないのは判り切つていたので、澹山はただ苦しい溜息をつくのほかはなかつた。

寺の鐘が四ツ（午後十時）を撞^つき出したのに気がついて、彼は寢床へ入ろうとした。用心ぶかい彼は寝る前にならず庭先を一応見まわるのを例としているので、今夜も縁先の雨戸をそつとあけて、庭下駄を突っかけて、大きい銀杏の下に降り立つと、星の光りすらも見えない暗い夜で、早寝の町はもう寝静まつていた。広い庭を囲^{むくげ}つてゐる榿^{いけがき}の生垣を

越して、向うには畑を隔てた小家が二、三軒つづいてある筈であるが、その灯も今夜は見えなかった。まして、その又うしろに横たわっている小高い丘や森の姿などは、すべて大きい闇の奥に埋められていた。

落葉の音にも耳をすまして、澹山はやがて内へ引つ返そうとする時、向うの田圃路たんぼみちに狐火のような提灯の影が一つぼんやりと浮き出した。丘の上に祠まつられてある弁天堂に夜まわりをした人であろうと思いつつも、彼はしばらく其の灯を見つめてみると、灯はだんだんに近づいて生垣の外を通り過ぎた。灯に照らされた人のすがたは主人の伝兵衛と伴の伝四郎とであることを、澹山は垣根越しにはつきり認めた。

「碁を打ちに行ったのではない。親子連れで夜詣りかな」と、かれは小首をかしげた。座敷へ帰つて、行燈あんどんをふき消して、澹山は自分の寢床にもぐり込むと、やがて母屋おもやの方からこちらへ忍んで来るような足音がきこえた。

三

澹山は蒲団の下に隠してあるあいくち首を先ず探つてみた。そうして自分の耳を蒲団に押し

付けて、熟睡したような寝息をつくっていると、足音は障子の外でとまった。もしやおげんが執念ぶかく忍んで来たのかとも疑ったが、その足音はもっと力強いように思われた。

「先生」と、外の人は小声で呼んだ。「もうおやすみでござりますか」

それが伝兵衛であると知って、澹山はすぐに答えた。

「いや、まだ起きて居ります。御主人ですか」

「はい。では、ごめんください」

勝手を知っている伝兵衛は暗いなかへはいつて来ると、澹山は起き直って行燈の火をともした。

「夜ふけにお邪魔をいたしましたして相済みませんが、荒木様の御息様からおあつらえの掛物はまだお出来に相成りませんか」と、伝兵衛は坐り直して訊きいた。

申し訳のない延引と澹山があやまるように云うのを聴きながら、伝兵衛は少し考えていたらしいが、やがてやはり小声で云い出した。

「就きましては先生、一方の御仕事のまだ出来あがないうちに、こんなことをお願い申すのは甚だ心苦しいようではござりますが、実は別に大急ぎで願いたいものがござりますて……」

「ははあ。それはどんなお仕事で……」

「御承知くださりますか」

「承知いたしましょう。わたくしで出来そうなことならば……」と、澹山は快く答えた。

「ありがとうございます」と、伝兵衛も満足したらしくうなずいた。「では、恐れ入りますが、これからわたくしと一緒にそこまでお出でくださりませんか。なに、すぐ近いところでござります」

これからどこへ連れてゆくのかと思つたが、澹山は素直に起きて着物を着かえて、匕首をそつとふところに忍ばせた。その支度の出来るのを待つて、伝兵衛は庭口の木戸から彼を表へ連れ出した。今度は提灯を持たないで、二人は暗い路をたどつて行つた。伝兵衛は始終無言であつた。

江戸の隠密ということが露顕したのかと、澹山はあるきながら考えた。城内の者が伝兵衛に云いつけて、自分をどこへか誘い出させて闇打ちにする手筈ではあるまいかと想像されたので、暗いなかにも彼は前後に油断なく気を配つてゆくと、伝兵衛はさつき帰つて来た田圃道を再び引つ返すらしく、それを行きぬけて更に向うの丘へのぼつて行つた。丘のうえには昼でも暗いぞうきばやし雑木林が繁つていて、その奥の小さい池のほとりには古い弁天堂の

あることを澹山は知っていた。

堂守どうもりは住んでいないのであるが、その中には燈明とうみょうの灯がともっていた。その灯を目あてに、伝兵衛は池のほとりまで辿つて来て、そこにある捨て石に腰をおろした。澹山も切株に腰をかけた。

「御苦労でござりました。夜が更けてさぞお寒うござりましたろう」と、伝兵衛は初めて口を開いた。「そこで、早速でござりますが、わたくしが折り入って描かいて頂きたいのはこれです」

澹山をそこに待たせて置いて、伝兵衛はうす暗い堂の奥にはいつて行つたが、やがて二尺ばかりの太い竹筒をうやうやしく捧げて出て来た。彼は自分の家から用意して来たらしい蠟燭に燈明の火を移して、片手にかざしながらしずかに云つた。

「まずこれを御覧くださりませ」

かなりに古くなつている竹は経筒きょうづつぐらいの太きで、一方の口には唐銅からかねの蓋が嚴重にはめ込んであった。その蓋を取り除のけて、筒の中にあるものを探り出すと、それは紙質も判らないような古い紙に油絵具で描かれた一種の女人像にょにんざうで、異国から渡つて来たものであることは誰の眼にも覺さとられた。伝兵衛がさしつける蠟燭あわの淡い灯で、澹山はじつとこ

れを見つめているうちに彼の顔色は変った。

「これは何でございます」と、彼はしずかに訊いた。

「弁天の御像でござります」

それは嘘であることを澹山はよく知っていた。この古びた女人像は、切支丹宗徒が聖母として礼拝するマリアの像であった。四国西国ならば知らず、この奥州の果ての小さい寂しい城下町でこんなものを見いださうとは、澹山はすこしく意外に思つて、手に持つている其の油絵と伝兵衛の顔とをしばらく見くらべていると、伝兵衛の方でも彼の顔をのぞき込みながら云つた。

「先生、いかがでござりましょう。それを模写して頂くわけにはまいりますまいか」

澹山は黙っていた。伝兵衛もしばらく黙つてその返事を待つていた。蠟燭の灯は夜風にちらちらとゆれて、時々とうす暗くなる光りの前に、彼の顔は神々しく輝いているように見られた。澹山は一種の威厳にうたれて、おのずと頭が重くなるように感じた。

「大方は御不承知と察して居りました」と、伝兵衛はやがてしずかに云い出した。「それはわたくし共に取りましては、命にも換えがたい大切な絵像でござります。この弁天堂もわたくしの一方で建立したのでござります。娘を連れて金毘羅まいりと申したのも、

実には四国西国の信者をたずねて、それと同じような有難い絵像をたくさん拜んで来たのでござります。こう何もかも打ち明けて申しましたら、御禁制の邪宗門を信仰する不屈き者と、あなたはすぐにわたくしの腕をつかまえて、うしろへお廻しになるかも知れません。しかしわたくし一人をお仕置になされても、私には又ほかに幾人も隠れた味方がござります。迂闊うかつな事をなさると、却つてあなたのお為になりますまい。あなたの御身分もわたくしはよく存じて居ります。今日まで百日あまりのあいだに、わたくしが一度口をすべらしましたら、失礼ながらあなたのお命はどうなっているか判りません。娘の命を助けてくだされた御恩もあり、もう一つは斯こういう御無理をお願い申したさに、今こんにち日までわたくしは固く口をむすんで居りました。この後とても決して口外するような伝兵衛ではござりません。その代りに……と申しては、あまりに手前勝手かは存じませんが、どうぞ快く御承知くださりませ」

自分をここまで誘い出して、おそらく闇討ちにでもするのであろうと澹山は内々推量していたが、その想像はまったく裏切られて、彼は思いもよらない難題を眼のまえに投げ付けられた。彼は国法できびしく禁制されている切支丹宗門の絵像を描かなければならない羽目はめに陥つたのである。隠密という大事の役目をかかえている彼は、手強くそれを匆はねつ

けることが出来ない。相手が伝兵衛ひとりならばいつそ斬って捨てるという法もあるが、ほかにも彼と同じ信徒があつて、その復讐のためにこっちの秘密を城内の者に密告されると、我が身が危ない。わが身のあぶないのは江戸を出るときからの覚悟ではあるが、大事の役目を果たさずには死にたくない。邪宗門ということが発覚すれば、伝兵衛も命はない。隠密ということが発覚すれば、澹山も命は無い。どっちも命がけの秘密をもっているのであるが、この場合には相手の方が強いので、澹山も行き詰まってしまった。

しかし斯う順序を立てて考えたのは、それから余ほど後のことで、その一刹那の澹山はただ何がなしに相手に威圧されてしまったという方が事実に近い。

「これを模写してどうするんです」と、彼はわざと落ち着き払って訊いた。

「それはおたずね下さるな」と、伝兵衛はおごそかに云った。「わたくしの方に入用があればこそ、こうして折入り入ってお願ひ申すのでござります」

自分の頼みを素直に引き受けてくれる上は、自分たちもかならずあなた的身の上を保護して、秘密の役目を首尾よく成就させてやると、伝兵衛は彼の信仰する神のまえで固く誓った。

四

それから一と月ほどの間、澹山は病氣と云つて誰にも逢わなかつた。夜も昼も一と足も外へ踏み出さなかつた。かれは千倉屋の離れ座敷に閉じ籠つて、朝から晩まで絵絹にむかつて、ある物の製作に魂をうち込んでいた。そのあいだに荒木千之丞は絵の催促にたびたび来たが、伝兵衛がいつもいい加減にことわつていた。十月の末になつて、ここらでは早い雪が降つた。

「先生、ありがとうございます。御恩は一生忘れません」

秘密の絵像が見事に出来あがつて、澹山の手から伝兵衛に渡されたときに、彼は涙をながして澹山を伏し拝んだ。そうしてその報酬として、伝兵衛の手からもいろいろの秘密書類が澹山に渡された。この一カ月のあいだに伝兵衛はおなじ信徒を働かせて、また一方にはたくさんの金を使つて、いろいろの方面から秘密の材料を蒐集して来たのであつた。

この城内における小さいお家騒動の事情はこれでいっさい明白になつた。嫡子忠作の死は毒害などではなく、まさしく庖瘡ほうそうであつたことが確かめられた。しかし藩中に党派の軋轢あつれきのあつたことは事実で、嫡子の死んだのを幸いに妾腹の長男を押し立てようと企て

たものと、正腹の次男を据えようと主張するものと、二つの運動が秘密のあいだに行なわれたが、結局は正腹方が勝利を占めて、家老のひとりには隠居を申し付けられた。用人の一人は詰腹を切らされた。そのほかに閉門や御役御免などの処分をうけた者もあって、この内ない証こうも無事に解決した。

これでもう澹山の役目は済んだものの、他人ひとのあつめてくれた材料ばかりを掴んで帰るのはあまりに無責任である。これだけの材料を土台として、自分が直接に調べあげて見なければ気が済まないので、澹山はここで年を越すことにした。千倉屋ではいよいよ鄭重に取り扱ってくれた。

十一月になって雪のふる日が多くつづいたので、澹山はこのあいだに彼かの千之丞から頼まれた掛物を仕上げてしまおうと思ひ立つて、再び絵筆を執とりはじめると、不思議にその西王母の顔が、かのマリアの顔に肖にてくるので、彼は自分ながら怪しく思った。幾度かき直しても絵絹の上にはマリアの顔が、ありありと浮き出して来るので、彼は自分もいつの間にか切支丹の魔法に囚とらわれてしまったのではないかと疑った。そうして、千之丞からいくら催促をうけても自分は絵筆を持たないことに決めて、かれは雪の晴れ間を待つて城下を毎日出あるいた。伝兵衛のあつめてくれた材料が彼に非常の便利をあたえたので、探索

は思いのほかに容易くはかどつて、小さいお家騒動の秘密は伝兵衛の報告と違いなこと
 が確かめられた。澹山は一々それを薄い雁皮紙がんぴしに細かく書きとめて、着物の襟や帯の芯しん
 なかに封じ込んだ。

秘密の絵像を描いているあいだは、父からも厳しく云い渡されていたのであろう。おげ
 んも余りうるさく寄り付いて来なかつたが、それがいよいよ出来あがると、彼女は先夜の
 約束通りにあなたのお弟子にしてくれと強請せがんで来た。澹山はよんどころなしに二つ三つ
 の手本をかいてやると、彼女は熱心に稽古をつづけて、あまり器用らしくもない彼女が案
 外めきめきと上達するのに、師匠も少しく驚かされた。しかしその熱心の裏には何かの意
 味が忍んでいるらしくも想像されるので、澹山はなんだかいじらしいような暗い心持にも
 なつた。

江戸の旅絵師は奥州の春をむかえて、今年ももう二月になつたが、ここらの雪はまだち
 つとも解けないで、うす暗い寒い日が毎日つづいた。今夜も細かい雪がさらさらと灰のよ
 うに降つていた。

「お寒うござります」

おげんは菓子鉢を持って、いつものように離れ座敷へ顔を出した。うるさい、いじらし

いを通り越して、この頃の澹山は彼女の顔をみるのが何だか恐ろしいようにも思われた。小賢こさかしい江戸の女を見馴れた澹山の眼には、何だかぼんやりしたような薄鈍うすのろい女にみえながら、邪宗門の血を引いているだけに、強情らしい執念深そうな、この田舎娘に飽くまでも魅みこまれたら、結局はどうしても彼女の虜とりこになるのではないかと、自分ながらも一種の不安を感じて来たので、努めて彼女に接近するのを避けているのであるが、彼女にもおそらく自分の秘密を知られているのであろうという不安と、今では仮りにも師弟となつている関係とで、この頃いよいよ摺り寄ってくる彼女をどうしても払いのけることが出来なかつた。

「ここらではいつ頃まで雪が降ります」と、澹山は手あぶり火鉢を彼女のまえに押しやりながら訊きいた。

「来月のはじめには歇やみましよう」と、おげんは茶をいれながら答えた。「もう十日か半月の御辛抱でござります。ここらで雪のやむ頃は、お江戸は花盛りでござりましよう」

澹山は江戸の春が恋しくなつた。去年の五月に江戸を発たつて、やがて小一年になる。雪のやむのを待つて早々に出発しても、上野や向島の今年の花はもう見られまいと思つた。

その心のうちを読むように、おげんはまた云つた。

「雪がやむと、すぐにお発ちになるのでござりますか」

うっかりした返事は出来ないので、澹山はあいまいに答えた。

「いや、まだ確かに決めていません。もう少しこちらに御厄介になりますか、それとも松島、塩釜の方へでも見物に行きますか」

「ほんとうでござりますか」と、おげんはまだ疑うように相手の顔色をうかがっていた。

「松島塩釜はわたくしも一度見物に参ったことがござります。もし先生が御見物ならば、わたくしに御案内させていただきますりませ」

どこまでも付き纏おうとする彼女の執念におどろきながら、澹山はなにげなく答えた。

「自然そういうことになりましたら、ぜひ御案内をねがいます。わたくしは御承知の通り、奥州の方角は一向不案内ですから」

庭の雨戸を軽くことごとと叩くような物音がきこえた。雪の音らしくないので、二人は話をやめて思わず顔を見あわせると、その物音は又きこえた。おげんは初めて起ち上がった縁側へ出ると、澹山は片手をのばして行燈をひき寄せた。

「どなた、誰です」と、おげんは障子をあげながら声をかけた。

外ではなんの返事もなかったが、雨戸をたたくような音はつづけて聞えた。おげんも根

負けがして、雨戸を細目にあけながら、雪明かりの庭先をのぞいたかと思うと、忽ちあつと叫んで座敷へ転げ込んで来て、澹山の膝のうえに半分倒れかかりながら、彼を掩うように両手をひろげた。澹山はすぐに手近の行燈を吹き消した。それとこれと殆ど同時に、ひと筋の手槍が暗いなかを縫つてきて、おげんの胸を突き透した。つづいて颯さつという太刀風が彼女の小鬢をななめに掠かすめて通つた。

澹山はもうその時、おげんの背後うしろにはいなかった。彼は早くも飛びさがつて蝙蝠こうもりのように横手の壁に身をよせて息をのみ込んでじつと窺つていると、槍と刀とは空くうを突き、空を撃つて、暗い座敷を二、三度流れたが、おげんの悲鳴を聞きつけて表の店から誰か駆けとくるらしい足音におどろかさされて、槍と刀は早くも庭先に消えてしまった。澹山はそつと壁がわをはなれて、縁側に出て耳をすますと、凍こおっている雪を踏み散らしてゆく足音が生垣の外へ遠くきこえた。

「先生、どうなされましたか」

暗いなかで呼びかけたのは、おげんの兄の伝四郎の声であつた。

「あかりを早く……」と、澹山は小声で云つた。「娘御が怪我をされたらしい」

伝四郎は無言で引つ返したが、やがて店の者三、四人と共に、手燭をかざして再び駆け

付けると、その火に照らされた座敷の内には、行燈が倒れていた。茶碗や土瓶がころげていた。襖の紙にも槍の痕と刀傷が残っていた。その狼藉をきわめたなかに、若い娘は血に染みて横たわっているのを一と目見て、伝四郎は思わず声をあげた。

「妹。おげん……しつかりしろ」と、かれは妹を自分の膝のうえに抱きあげて叫んだ。

「先生……」と、おげんは微かに云った。

「わたくしはここにいます」

澹山はおげんの眼のまえに顔を出した。その顔をうっとり見つめているうちに、彼女のからだは兄の膝からぐったりと滑り落ちた。少し風邪をひいたと云って早寝をしていた伝兵衛が、眼をさましてここへ駆け付けた頃には、おげんの息はもう絶えていた。委細の事情を澹山から聞いて、彼は娘の死に顔を悲しげに眺めていたが、やがて何を考えたか、いたずらに恐怖の眼をみはっている奉公人どもの方に振り向いた。

「先生に少しお話がある。伝四郎だけはここに残って、皆はしばらく店の方へ行っている」
 彼等を追い遠ざけて、伝兵衛は澹山のまえに坐り直した。その顔は弁天堂の前で彼にマリアの絵像を頼んだときと同じように、なんとなく人を威圧するようなおごりかなものであった。

「先生、あなたの御身分は決して他人に洩らすまいと、神にも誓って置きながら、今夜のようなことが出しゅつ来たいいたしましては、定めてわたくしを偽り者ともお憎しみでござりましようが、これには別に仔細がござります。今夜の闇討ちはおそらく先生の御身分を知つてのことではござりませぬ。これは用人の荒木頼母がせがれ千之丞の仕業に相違あるまいと、わたくしは睨んで居ります」

千之丞はかねて千倉屋の娘に懸想けんそうしていて、町人とはいえ相当の家柄の娘であるから、仮親かりおやを作つて自分の嫁に貰いたいというようなことを人伝ひとづてに申し込んで来たが、娘も親も気がすまないで先ずその儘になつていた。彼が澹山の絵の催促にかこつけてたびたび此の店へたずねて来るのもそれが為であつた。そのうちに誰の口から洩れたのか、娘が旅絵師と特別に親しくしているという噂が千之丞の耳にはいつたらしい。現に先頃も絵の催促に来たときに、彼は直接に伝兵衛にむかつて、あの旅絵師を娘の婿にするのかと訊いたこともある。彼は暴氣あらしきの若侍であるから、その嫉妬から旅絵師を亡き者にしようとしたくらんで、おなじ暴れ者の若侍どもを語らつて今夜の狼藉に及んだに相違あるまい。かれは江戸の隠密として澹山を殺しに来たのではなく、恋のかたきとして澹山をほろぼしに来たのであろう。おげんは彼を庇かばおうとして、その身代りに立ったのである。この意見には伝

四郎も一致して、妹のかたきは千之丞に相違ないと云い切った。

「おやし様、この仇をどうする」と、寡言むくちの伝四郎は憤怒に燃える眼をかがやかして父に迫った。

「かたきはきつと取る。家老でも免ゆるすものか」と、伝兵衛は再びおごそかに云った。「ついては先生。こういうことになりましたは、又どんな御迷惑しゅつたいが出来しゅつたいして、自然あなたの御身分が露顯するようなことが無いとも限りません。御用も大抵お片付きになったようでございますから、雪のやむのを待たずに一日も早く御発ごほつそく足なされるようにお勧め申します。しかしこの領分りやうぶんがいを越えましたなら、きようから数えて二十一日、娘の三七日さんしちにちの済むまでは、どうぞ其処に御逗留ごどまりなさる様に願います。きつと何かあなたのお耳にはいることがござりましょう」

饒別の金や土産みやげなどをたくさん貰つて、澹山はおげんの葬式のすんだ翌日に千倉屋を出発した。これがもうこの春の名残りらしい細かい雪が、けさも彼の笠の上かさのうへにちらちらと降っていた。伝兵衛も伝四郎も町はずれまで送つて来た。千倉屋の若い者二人は彼の警固けいこをかねて領りやうがいかいまで付き添つて来た。

隣国の他領へはいつて、千倉屋から指定された宿屋に草鞋わらじをぬいで、澹山は約束の三週

間をここに逗留することになった。三月も半ばになって、ここの雪もあたたかい春の日にだんだん解けはじめた頃に、隣国の用人の若い伴が、何者かに闇討ちにされたという噂がここまで聞えたので、澹山は初めて重荷をおろしたような心持になって、そのあくる日に出発した。

江戸へ帰る途中で、彼は再び房川の渡しを越えるときに、おげんがここで自分の手に救われたのが仕合わせであったか不仕合わせであったかということを考えた。彼は北にむかって、ひそかに千倉屋の娘の冥福を祈った。

無事に使命を果たして帰った彼は、組頭くみがしらにも褒められ、上かみのおぼえもめでたかった、しかし彼は決して切支丹のことを口にしなかった。彼は再び絵筆を執らなかつた。

千倉屋からはその後何のたよりも無かつたが、それから五年ほど経つた後に、奥州のある城下町で切支丹宗門の者十一人が磔はりつけ刑にかつたという噂を聞いた時に、彼はすぐに伝兵衛父子おやこの名を思い出した。そうして、おげんはやっぱり仕合わせであったかとも思つた。弁天堂の奥に秘められていたマリアの絵像も、かれが模写した同じ絵像も、どうなつたか判らない。おそらく誰かの手で灰にされてしまったであろう。

青空文庫情報

底本：「時代推理小説 半七捕物帳（三）」光文社文庫、光文社

1986（昭和61）年5月20日初版1刷発行

1997（平成9）年5月15日11刷発行

※旺文社文庫版を元に入力し、光文社文庫版に合わせて校正した。

入力：網迫

校正：柳沢成雄

2000年9月23日公開

2004年3月1日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

半七捕物帳

旅絵師

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 岡本綺堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>